

古代山城における土塁構造の検討

渡邊 芳貴（西条市教育委員会）

1 はじめに

九州・瀬戸内を中心とした西日本には、現在 20 数か所の古代山城が確認されている。これらは研究史上、『日本書紀』等の文献に記載のある山城を中心とした「朝鮮式山城」と、文献に名のない「神籠石山城」に分類されてきた⁽¹⁾。後者については、神籠石論争の名で知られるように聖域説と山城説が激しく議論を繰り広げていたが、佐賀県おつぼ山神籠石等に対する発掘調査の結果、山城であることが明らかにされた⁽²⁾。ただし、これにより神籠石に対するすべての謎が解決された訳ではなく、築城の年代や目的についての議論は現在まで続いている。

その要因の一つであり最も大きな問題は、遺跡の規模が大きく全面的な調査を実施できないため、全体像を把握しづらいという点に集約できるのではないだろうか。しかしこのような問題についても、近年は各地の山城で史跡の整備・活用を前提とした発掘調査が活発に実施されており、新たな事実の確認や資料の蓄積が進んできている。そして、これらの成果に基づく山城の編年的研究や技術論、さらには周辺遺跡との関係に着目した幅広い検討もなされる等、研究内容も多様化している。

このような中、愛媛県西条市に所在する永納山城では、平成 14 年度から 23 年度にかけ実施した発掘調査により、多くの事実が明らかとなってきた⁽³⁾。特に城壁については、約 40 か所のトレンチ調査を行い、さまざまな情報が得られている。

本論ではまずこれらの成果から、永納山城の土塁を検討する。つづいて、その内容に沿いつつ各山城の土塁構造を比較することにより、土塁の共通点や相違点を明らかにし、それらがどのような要因に基づいているのかを検討していく。

2 城壁研究の現状

古代山城の城壁構造に関する研究をみると、列石の露出・非露出の問題や列石前面の柱穴に関する研究、土塁構造の主要な技術である版築工法についての議論等がこれまでも活発になされている⁽⁴⁾。

一方、土塁の形態や構築手順についての研究は、各調査報告書等でその特徴について検討される場合が多く、その中には城壁の特徴を非常に詳細に分析したものもみられる⁽⁵⁾。しかし、山城全体を見渡した上での土塁の検討は、ほとんどなされていないのが現状である。

このような中、城壁構造を類型化した研究として、向井一雄氏の研究をあげることができる（向井 2001）。向井氏は城壁の分類を内托・夾築、高さ、幅等の違いに加え、城壁の取り回し方といった戦術的な違い、そして列石の特徴等も踏まえた総合的な検討から城壁を 3 類型に分類している（図 1）。この分類は、複数の要素を整理した結果であり、山城の特徴を捉えやすく、その後の研究に影響を与えた。一方でこの分類は、土塁以外の要素も踏まえた類型であったため、土塁そのものに対する説明はやや省略されている。また、

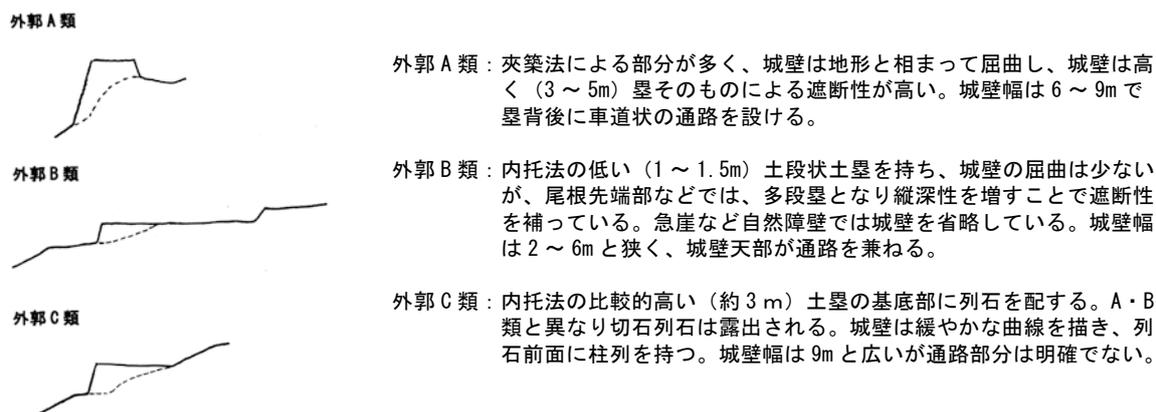


図1 向井氏による城壁分類

その後の各山城の調査では、この分類に当てはまらないと思われる例もみられる。

そこで、各山城により城壁に対する調査の進展状況に違いはあるものの、今一度土塁の構造を整理していく必要がある。

なお、今回の検討は、完成時の土塁の形態（高さ、幅、位置等）という表面的な構造から、土塁の類型化を試みるものである。したがって、版築の工法や土塁の積み上げ工程といった技術論は対象としていない⁽⁶⁾。

3 永納山城概略

(1) 地理的環境

永納山城は、瀬戸内海によって分断される本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」の四国側の出発点となる高縄半島の西側付け根に位置し、瀬戸内海を眼下に望む独立丘陵上に築城されている（図2）。また、当地は現在の西条市・今治市の市境に位置し、これは古代の越智郡・桑村郡との郡境、今治平野と道前平野の境とも一致する。さらに遺跡の西側ふもとは、伊予国府の所在した今治平野へ通じる南海道が通過していたと推定されている。

(2) 遺跡の規模・地形的特徴

遺跡の規模をみると、城壁外郭線は推定部分を含め全周約2.5kmに及び、標高は東部の山頂で132mを測る。地形的な特徴としては、「永納山」と呼ばれる城の主体をなす丘陵と、その北西側に位置する「医王山」と呼ばれる山塊を城域として取り込む。また、これらの丘陵・城壁は、南北に伸びる谷を取り込むように巡っており、包谷式山城に含まれる。

4 永納山城の城壁構造

永納山城の主たる城壁構造としては、以下の3種類が確認されている。

- ①列石と土塁による城壁構造
- ②石積みによる城壁構造
- ③自然地形を利用した城壁構造

これらのうち、今回主に検討を加えるのは、①列石と土塁による城壁構造である。しかし、土塁の高さや幅を復元想定する過程で、②、③の城壁も参考としていく。

(1) 地形から想定される永納山城の土塁の特徴

永納山城の尾根は、中央の谷を取り囲むように馬蹄形に延びるため、尾根の大半は断面かまぼこ形を呈する。城壁はこの尾根斜面に築かれ、これまでの調査では、城内側に人工

古代山城における土塁構造の検討



図 2 永納山城跡位置図 (S=1/120000)

的な盛土は確認されていない。このような状況から、永納山城の城壁は基本的に尾根外側斜面を利用して築かれる内托土塁であった可能性が高い。

(2) 尾根筋と列石との距離

次に尾根筋と土塁との関係をみていきたい。これは、城壁を築く際には、尾根筋が一つの基準であったと想定できるからである。土塁は現地の地形に依拠するところが大きく、この点に着目することにより、城壁構造の違いを見出せる可能性がある。そこでまず、城壁の基礎となる列石から尾根筋までの関係をみると、次のように2種類に分類が可能である。

I類：列石と尾根筋との距離が短く、すぐ背後に尾根筋が迫るもの

列石と尾根との水平距離は5m程度、列石上面から尾根筋までの高さは3m未満。

II類：列石から尾根筋までの距離が長く、尾根筋が緩やかに延びるもの

列石と尾根との水平距離は10m程度、列石上面から尾根筋までの高さは3～4m程度。

では、このI類とII類の違いは何を反映しているのだろうか。図3に各トレンチの位置を示している。

これをみると、この違いには城壁の位置する地形が影響しているものと思われる。すなわち、I類は尾根の鞍部付近に位置し、II類は各頂部と鞍部とを結ぶ比較的直線的に伸びる尾根の斜面に位置するという特徴を見出すことができる。永納山城の場合は頂部から鞍部に向かうに従い尾根幅は狭まっていき、必然的に列石（城壁前面）と尾根筋との距離は縮まる。このことから、列石の据え付け場所は、単純に「尾根筋から何m」といったのではなく、地形に規制されていることを読み取れる。

次にそれぞれのタイプに築かれた土塁をみていくと、I類（図4-①・②）では、土塁が尾根筋まで築かれ、II類（図4-③～⑦）では、土塁はいずれも斜面の途中で収束する。

それでは、II類の土塁は築造当初から尾根斜面で収束していたのか、あるいは本来は尾根筋まで築かれていたのであろうか。この点を明らかにするために、他の城壁を含め永納山城の土塁の高さや幅を検討し、II類における土塁の状況を復元してみたい。

① I類における土塁の状況：土塁の高さは、1.4～2.6mである。後世の若干の流失は想定できるが、土塁が尾根筋まで残存していることから、ほぼ築城時の高さを示していると考えられる。

② 自然地形を利用した城壁の状況：人工物としては列石のみを据え、その背後は自然地形を利用して土塁を築かなかつたと考えられる城壁がある（図5-⑧・⑨）。これらの城壁は、列石から尾根筋までの水平距離が約8.4m、9.3mとII類に近い。また、列石と尾根筋との比高差は4m程度である。この斜面のどこまでを城壁とするかは判断に迷うところであるが、地山の変換点を土塁の上端部に相当すると積極的に評価するならば、城壁高は2.5m前後に復元できる。

③ 石積みによる城壁の状況：石積みは3か所にみられる。

③-1 西部頂上付近の石積み（図5-⑩）：尾根筋との水平距離は約7.4m、石積み下端と尾根筋との比高差は4.5mとII類に近い。石積みの高さは1.8mと低く、石は尾根筋と同じ高さまで積まれていない。

③-2 東部石積み（図5-⑪）：尾根筋との最短での距離は約17mである。石積みは、

最大4段に石が積みれ、幅は約5m、高さは現存約1mを測る。

③-3 北東部石積み(図5-⑫):⑤の土塁に接して積み上げられた石積みで、高さは現存で1.5mを測る。

以上のような状況を見ると、永納山城の城壁の高さはその構造や尾根筋との距離にかかわらず、低いところで1m程度、高くとも3m未満であったと想定できる。このような理解が可能であれば、Ⅱ類において復元される土塁の高さは、最大に見積もったとしても3mまでに納まっていた可能性が高い。さらに、この数値に基づき土塁を復元すると、土

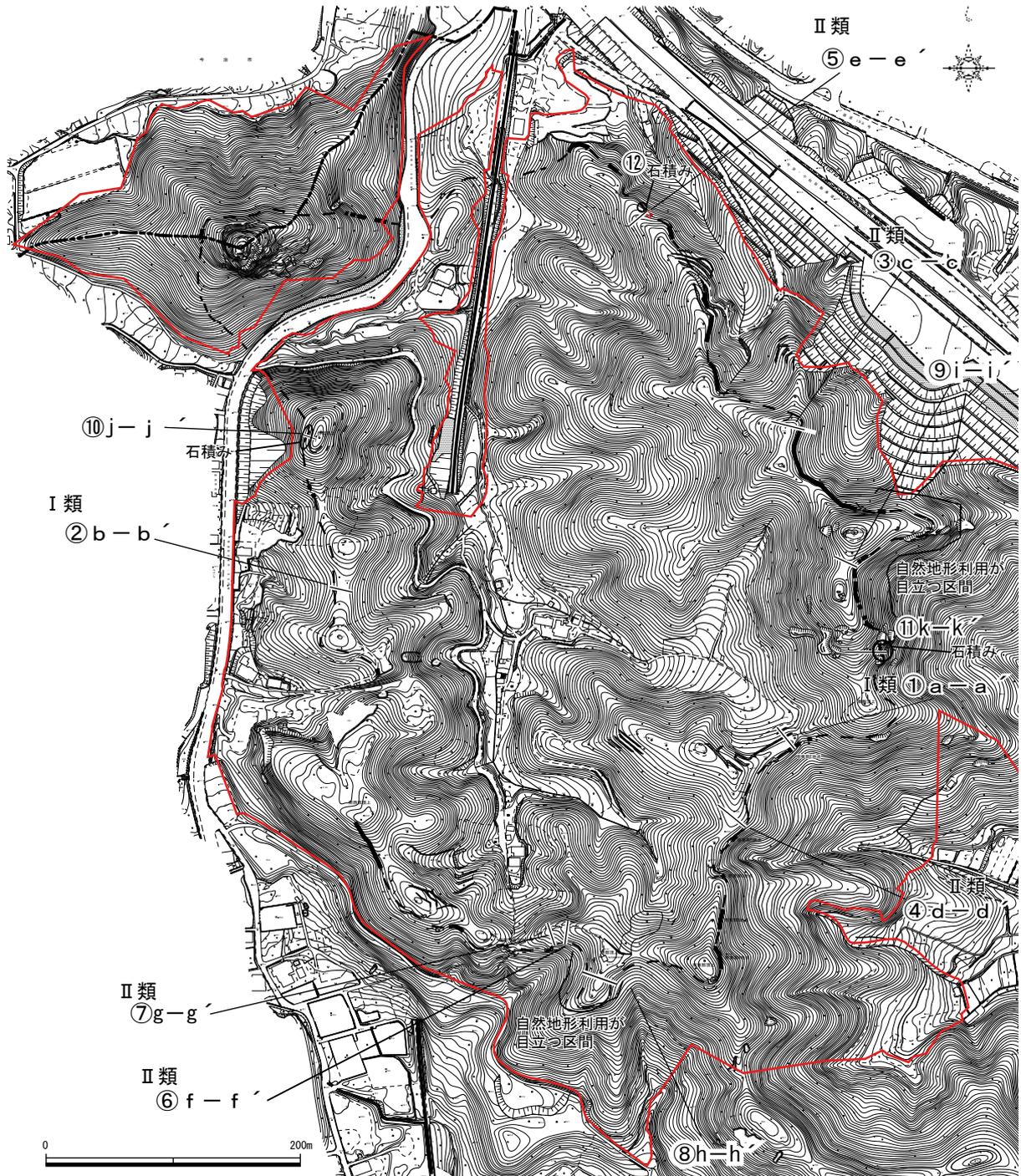


図3 永納山城跡地形図 (S=1/5000)

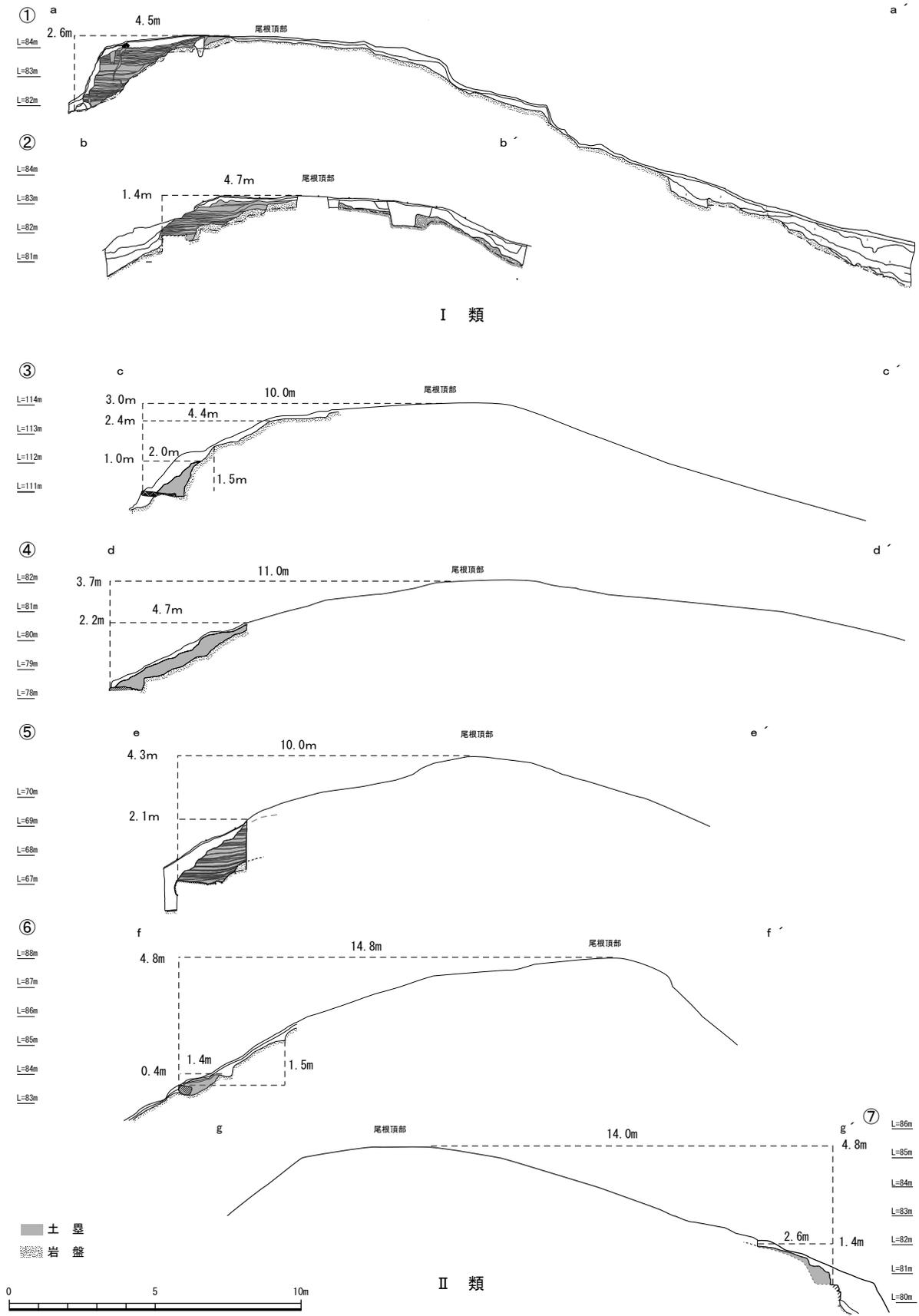


図4 永納山城跡の城壁(1) (S=1/200)

古代山城における土塁構造の検討

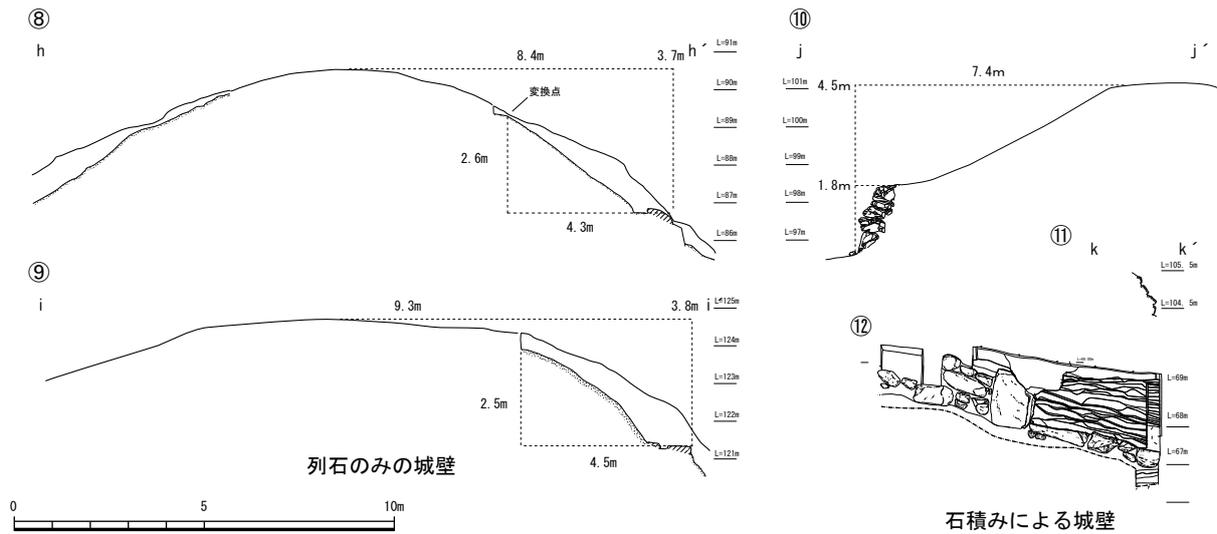


図5 永納山城跡の城壁（2）（S=1/200）

塁上部の幅は約4～5mとなり、この数値はI類における土塁幅とほぼ一致する。そしてII類における土塁は、尾根筋までは築かれなかったものと考えられる。

このように永納山城の土塁に関しては、先に述べた高さ2～3mという共通性に加え、幅5m前後という一定の基準が存在したことを想定できる。

（3）土塁・石積み・自然地形利用の使い分け

永納山城では、城壁はほぼ全周することが確認されており、少なくとも城壁は完成していたと理解できる。しかし、既述のとおり城壁には、土塁を中心としながらも石積みや自然地形利用のものが認められる。それでは、この使い分けはどのように行われていたのでしょうか。

まず、土塁と石積みに関しては、素材は異なるものの人工的に城壁を築くという点で共通する。石積みは3か所でしか確認されておらず、構築基準は明らかでない。しかし、西部頂上や東部鞍部の石積みは、それぞれふもとの南海道、燧灘を見下ろす場所にあり、このような立地が関係しているのかもしれない。

一方で自然地形利用の城壁は、山中に露出する岩盤や急傾斜地にみられる。これらには自然地形のみを城壁として利用している場合と、列石を据えたり部分的に人為的な手を加えている場所とがある。ここで問題となるのは、当初から土塁が築かれていなかったのかという点である。それを検討するために、周辺の地形との比較を行いたい。列石のみを据えた城壁とした⑨地点の周辺は、特



写真1 自然地形を利用した城壁



写真2 列石と背後の岩盤

に自然地形利用の目立つ区間である（写真1）。現地には今も岩盤が露出しており、それらの露岩をつなぐように列石が並べられる。この露岩にはテラス状の加工といったような、その上に土塁を築いた痕跡は認められない。そこで露岩とそこに並べられた列石背後の斜面の傾斜をみると、それらはほぼ一致している。また、列石背後には通常、列石に比べやや小ぶりの石が置かれるが、この辺りの城壁では岩盤をカットした後、列石のみを据える例もみられる（写真2）。これはあたかも列石を据えるためにだけに、岩盤を整形したように思われる。以上のような状況から、この周辺では築城当初から列石の上に土塁は積まれていなかったものと判断できる。

列石のみが現存する場合、城壁の本来の姿を復元することは難しいが、このように周辺地形との比較により、本来の土塁の存否を判断できる場合もある。

5 古代山城における土塁構造

つづいて、他の古代山城の土塁がどのような状況を示しているのかを見ていきたい。永納山城において、土塁の規模に一定の規格性を認めることができたが、同様の特徴を他の山城にも当てはめることは可能であるのか、またそれらの特徴を基に山城を分類することができるのかを検討していく。なお、本来であれば、すべての古代山城の土塁を比較検討すべきであるが、土塁の状況のはっきりとしない山城については、対象から除いた。

(1) 土塁の分類（図6）

①尾根と土塁の位置

先にみた永納山城の土塁の位置を参考にし、さらに永納山城では明らかでない谷部をⅢ類として加えた。

I類：尾根筋（付近）まで築かれるもの

II類：尾根斜面途中で収束するもの

III類：谷部に築かれるもの

②土塁の高さ

各山城の土塁の高さをグラフに示したも

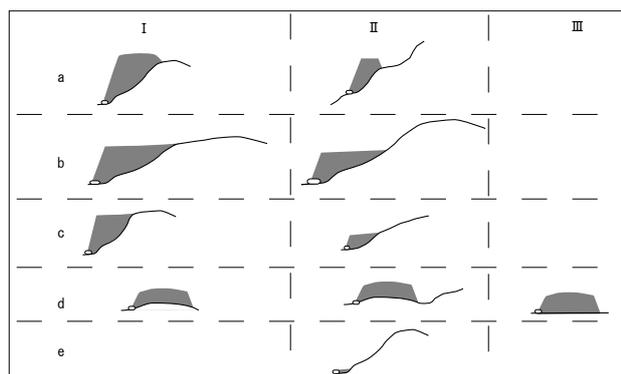


図6 土塁断面模式図

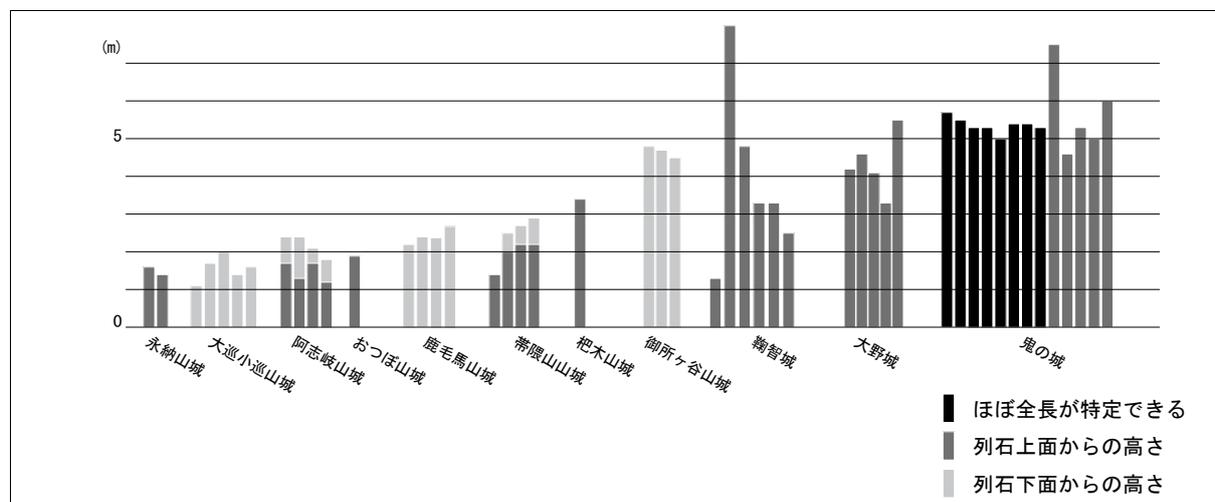


図7 各山城における土塁の高さ

のが、図7である。現存する土塁は必ずしも築城当時の高さを示しておらず、さらに土塁の高さには明確な境界を引けないものの、相対的に高い土塁を築く山城と低い土塁を築く山城とがあることを読み取れる。

そこで、土塁の高さに基づき、2分類する。

A：低い（おおよそ3m程度までのもの）

B：高い（おおよそ3m以上のもの。4mを超えるものが多い）

③土塁の形状（図6）

土塁の断面形状を基に以下のように、5分類する。

a：下部は内托であるが、上部が夾築状になるもの（半夾築）

b：内托土塁で、上部がほぼ水平となり、幅の広いもの

c：内托土塁で、上部の水平部がほとんどないもの。あるいは幅狭のもの。ただし、本来はb類であったものが、後世の崩落等によりこのようになったものも存在する可能性がある。

d：夾築部が大半となるもの

e：列石の裏にのみ、盛土がみられるもの

これらの基準により分類したものが、図8・9である。

（2）各山城の状況

次に、上記分類を基に各山城の状況をみていくこととする。

・大廻小廻山城

城壁は、内托土塁による下段部と主に地山削り出しによる上段部との2段構造となることが指摘されている（図8-12～14）。土塁の高さは2m前後と規格性がみられる一方で、土塁幅は5～10mと明確な規格性は読み取れない。しかし、上段部を含めた城壁幅は、約12mと規格性の存在が指摘されている。また、一ノ木戸周辺や尾根先端部では、夾築状の土塁となる（図9-11）。

・帯隈山神籠石

土塁の高さは、列石下面から1.4～2.9mである。そのうち1.4mと低い土塁（1990年調査地）では、列石背後にほとんど盛土が確認されていない（図9-17）。その他の土塁は内托土塁（b類）で、高さ2m以上、幅8m以上となり、土塁上面にしっかりとした平坦面がみられる（図8-10・11）。

・阿志岐城

土塁の基礎に並べられる列石が他の山城に比べ複雑であるため、列石上面からの土塁の高さをみると1.3～1.7mである（図8-17）。参考までに列石下面からの高さは2.1～3m程度となる。土塁幅は不明である。

・鹿毛馬神籠石

しっかりと土塁を築く場所と、列石背後に部分的に盛土を確認できる場所とがある。土塁をしっかりと築いている場所では、その高さは列石上面から2.2～2.7mとなる（図8-4・5）。土塁は基本的に内托土塁であり、土塁幅は7～8m前後で上面にはしっかりとした平坦面が残る（b類）。なお、谷部に築かれた土塁（図9-13）は、夾築（d類）である。

さらに、列石背後に部分的に土塁を築くものが、1998年度調査E・J・I地点で確認できる（図9-18）。

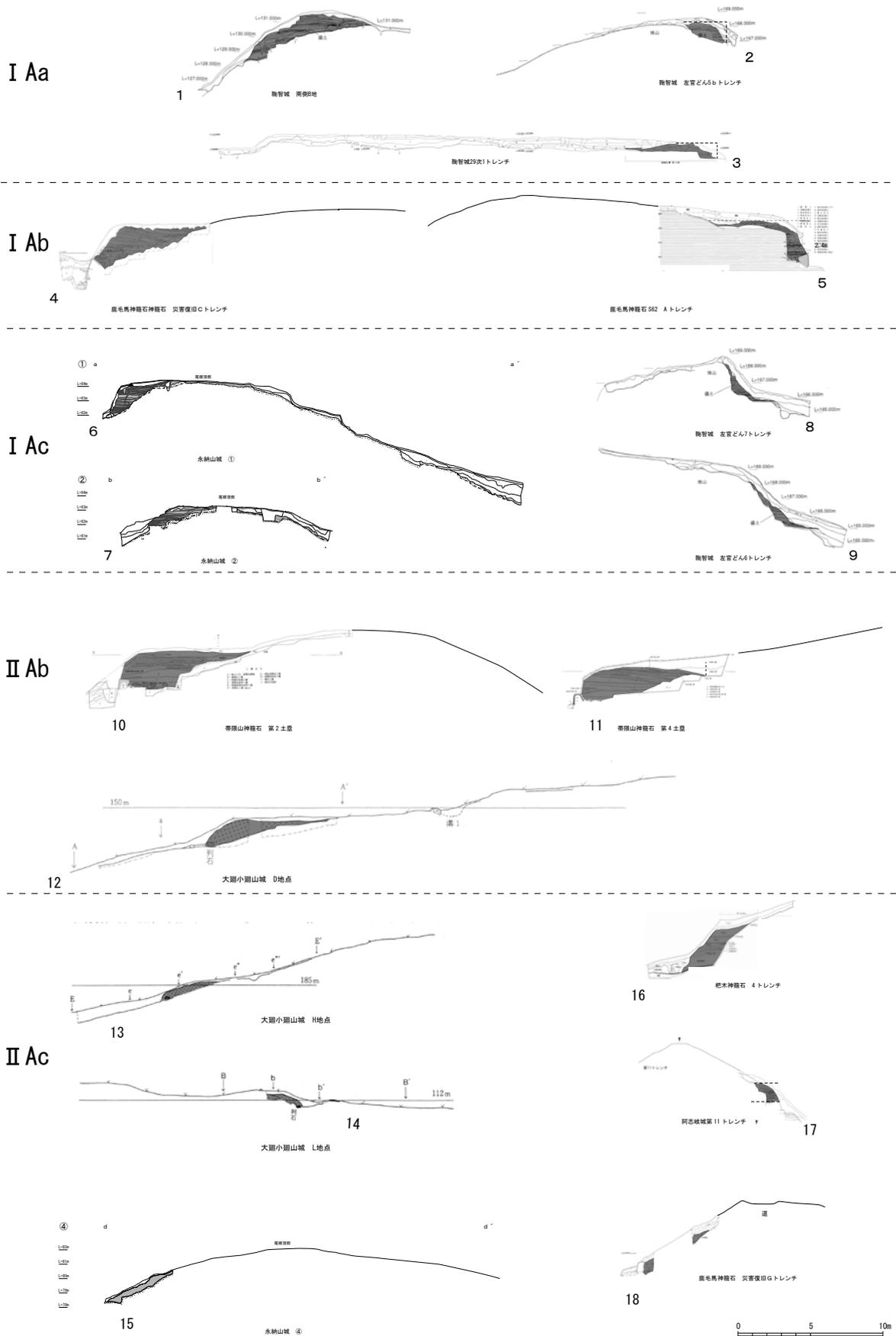


図8 各山城の土塁 (1) (S=1/250)

古代山城における土塁構造の検討

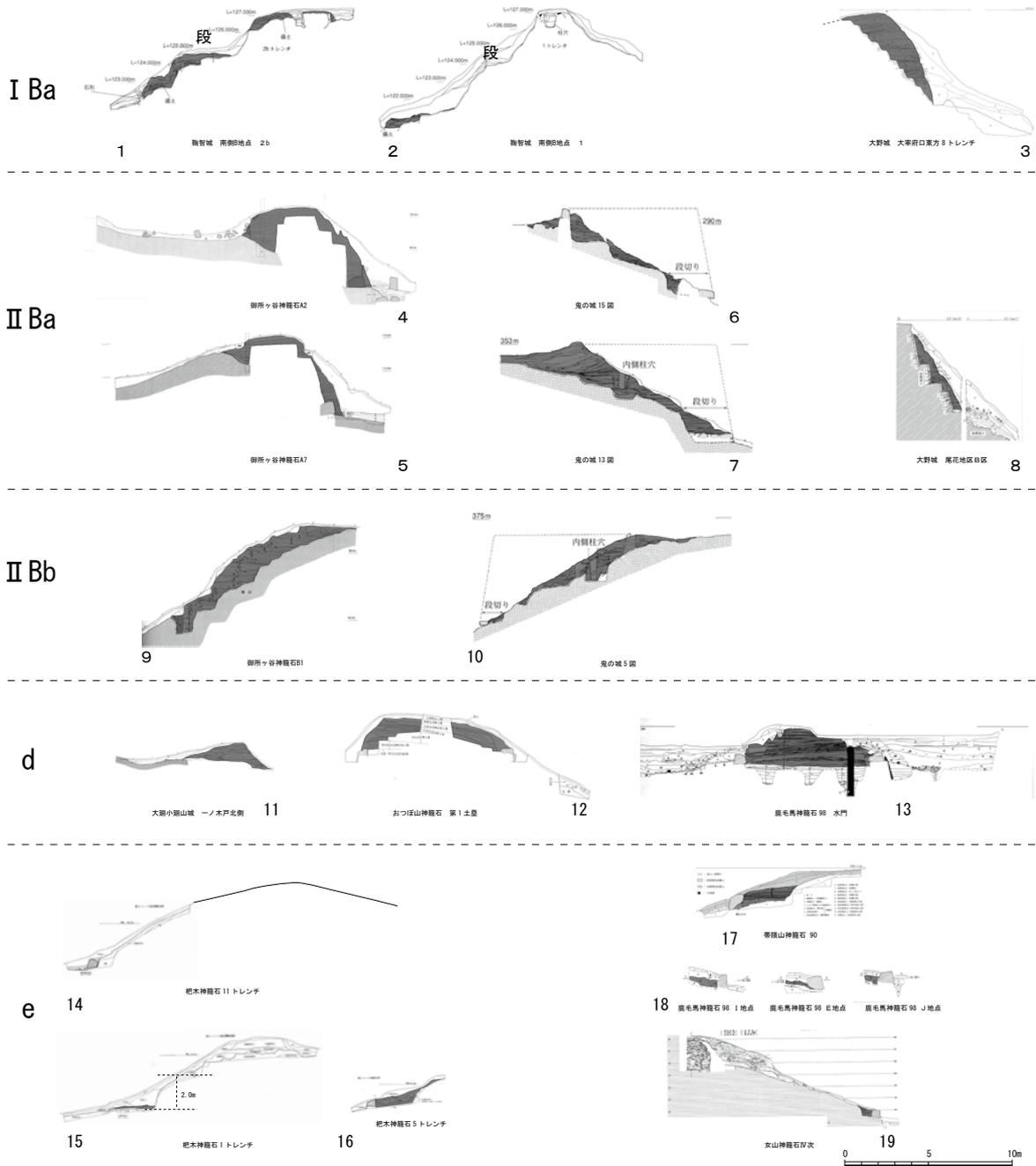


図9 各山城の土塁（2）（S=1/250）

・女山神籠石

土塁の規模は不明であるが、しっかりと土塁を築く地点と、列石背後にわずかに盛土を確認できる地点（図9-19）とがある。

・杷木神籠石

しっかりと土塁を築く地点（図8-16）と列石背後にわずかに盛土を確認できる地点（図9-14～16）とがある。土塁の高さは、4トレンチで列石上面から3.4mを測る。

・おつぼ山神籠石

鞍部に築かれる土塁（第1土塁）は夾築土塁で、列石上面からの高さ1.9mを測る（図9-12）。一方で第2土塁は列石のみを並べ、背後の土塁は確認されていない。

・鬼の城

背面列石の存在等から土塁本来の高さが復元されている鬼ノ城では、高さ5～6m、幅7m前後の土塁がほぼ統一的な規格であったことが明らかにされている。土塁の断面形は内托、もしくは上部が夾築状となる半夾築土塁である（図9-6・7・10）。

・大野城

土塁の高さは3.3～5.5m前後であり、その中でも4m以上のものが主体となる。太宰府口東方土塁地区、尾花土塁地区B地点や水ノ手口西方土塁地区等で半夾築の土塁がみられる（図9-3・8）。一方で尾花土塁地区A地点では、内托土塁が確認されている。なお、報告書では「山頂から一段低い斜面を掘り切りそのすぐ下方に夾築構造の土塁を作るという工法は、城内各所で見られ、大野城跡の土塁を施工する際の一つのパターンとなっており」と述べられており、夾築土塁は内托土塁と共に一定量みられるものと考えられる。また、土塁と尾根との位置関係については、「土塁は尾根のピークを走っているわけではなく、ピークが高いところではそのやや下方の城外側法面の途中を内托式の土塁が斜面に張り付くようにして伸び、また尾根の低いところでは夾築の土塁自身が尾根のピークとなって盛り上げられるように作られている」とその特徴が述べられている。

・御所ヶ谷神籠石

土塁の高さは、緩やかな尾根斜面、谷に向かうやや急斜面の土塁で、列石下面から4.5～4.8m、土塁幅は7～8mを測る（図9-4・5・9）。土塁の断面形は内托土塁と、上部のみ夾築となる半夾築土塁とがある。

・鞠智城

南側土塁線B地点1トレンチ・2bトレンチ（図9-1・2）や堀切門跡の土塁は、残高5～8mで、削り出しによる2段構造となる。一方で、西側土塁線（図8-8・9）では段を有さない4m弱の土塁が確認されている。さらに、南側土塁線東端A地点（図8-3）や南側土塁線西端部B地点6トレンチ（図8-1）では半夾築の土塁が検出されており、土塁構造にはいくつかのバリエーションが認められる。

表1 土塁の特徴

	土塁の高さ	土塁の幅の規格性	谷・鞍部以外の半夾築土塁	備 考
御所ヶ谷神籠石	高い	○	○	
鬼の城	高い	○	○	
大野城	高い	○	○	
鞠智城	高い	?	○	削り出しによる2段構造あり
石城山神籠石	高い	?	?	
永納山城	低い	○		
鹿毛馬神籠石	低い	○		
帯隈山神籠石	低い	○		
大廻小廻山城	低い	△		削り出しによる2段構造あり
おつぼ山神籠石	低い	?		
杷木神籠石	低い	?		
阿志岐城	低い	?		
山城分類の基準	◎		○	
各山城内での規格性	○	○	○	
地形の影響	△	○	△	

(3) 土塁の特徴

以上のように各山城の土塁を概観した結果、土塁の特徴には地形により左右される要素、地形にかかわらず一定の規格性・統一性が存在していた可能性のある要素とに分けて考える必要性が浮かび上がる。後者については、さらに個々の山城内での規格性・統一性と捉えられるものと、複数の山城間に共通するものとの存在する可能性を指摘できる。

そこでまず、各特徴を再整理していきたい。これらの特徴を表に示したものが、表1である。

・山城にみられる各特徴

①土塁の高さ：山城間を区分できる第一の特徴は、土塁の高さである。すなわち、高い城壁を築く山城と低い城壁を築く山城が存在する。

まず、御所ヶ谷神籠石、大野城、鬼ノ城、鞠智城のように、高さ4m以上の土塁をもつ山城群がある。なお、図面は示されていないが、石城山神籠石も高い土塁が構築されるようである⁽⁷⁾。

一方、永納山城や大廻小廻山城、阿志岐山城、鹿毛馬神籠石等、高さ2m前後の低い土塁を築く山城が存在する。

なお、高い土塁を築く山城においてもすべての土塁が高いわけではなく、低い土塁も存在する。これは、土塁の高さに関しても地形による影響を完全に排除しているわけではないことを示していると考えられる。

②土塁の幅：永納山城の土塁幅は、復元推定で約5m程度という共通性が認められた。また、九州の一部の山城（鹿毛馬神籠石や帯隈山神籠石等）では、幅9m前後の土塁が目立ち、共通した特徴といえるのかもしれない⁽⁸⁾。

一方で阿志岐山城では、地形により土塁幅に倍近くの違いのあることが指摘されている。また、大廻小廻山城でも、土塁幅は5～10m程度とさまざまである。ただし、大廻小廻山城では地山削り出しを基本とする上段部と合わせると、約12mという規格性の存在が指摘されている。

このように土塁幅に関しては、山城を分類できる可能性はあるものの、個々の地形的特徴に左右される場合も認められる。さらに土塁幅の把握できる資料数の問題もあり、現段階では、その可能性を指摘するにとどめておきたい。

③内托、半夾築、夾築といった土塁の断面形態：谷に向かう尾根斜面（大廻小廻山城）や城門周辺（御所ヶ谷神籠石）、尾根鞍部（おつぼ山神籠石）等、尾根幅の狭まる地形では夾築・半夾築の土塁が築かれることが多い。また、鞠智城では尾根先端部付近の土塁に半夾築のものが数か所で認められ、これも地形的な特徴となるかもしれない。

一方で、半夾築の土塁に関しては、一定の山城に共通した手法であった可能性もある。鞍部や谷に向かう急斜面を除いた地形での半夾築土塁については、鬼ノ城や大野城、鞠智城等に例がある。これらは、大きくまとめると、主に高い土塁を持つ山城に特徴的にみられる。

④完成時の形態の多様性：土塁表面は後世の掘削や崩落等による改変を受けやすく、仮にテラス等による段が造られていたとしても現存していない可能性もあり、本来の姿の復元は難しい。このような中、鞠智城では削り出しと盛土を併用して形成された、2段構造の土塁が確認されている。鞠智城の土塁構造を検討した矢野裕介氏は、これらの土塁は防

御正面に位置し、城壁高を高くすることにより視覚的効果を狙ったものと想定している⁽⁹⁾。また、大廻小廻山城においても、内托土塁と削り出しによる2段構造の土塁が存在する。この2つの城の土塁では、高さや幅に違いがあり、そのまま同等に評価することはできないが、これらの事例は完成時の土塁の形態に多様性があったことを示している。

⑤明確な土塁を構築しない城壁：列石の背後にわずかに土塁（盛土）がなされるもの、列石のみが据えられるものがある。

土塁の築かれていない部分に対する説明については、山城が未完成であったとする説と重要な部分のみ土塁を築いたという説があり、いまだ意見の分かれるところである⁽¹⁰⁾。しかし、いずれにしても土塁の築かれていなかった部分が存在したことは間違いのない事実である。永納山城でも列石のみが据えられて、その背後に土塁を確認できない城壁が存在する。これについては、すでに検討したとおり、築城当初から土塁を築いていなかったものと判断できる箇所が存在する。そして、それは周囲の地形に影響されることを確認した。

このように理解すると、列石背後の土塁の存否については、地形等に影響された設計の中で当初から決まっていた場合もあるのではないだろうか。すなわち、列石と土塁による城壁と石積みによる城壁を築く場所が、おそらく当初設計の中で決められていたように、①列石＋土塁、②列石＋列石裏の盛土、③列石のみ、④列石も据えない自然地形利用、といった区分が存在していた可能性を想定したい。

城壁の有無は、山城の完成・未完成を議論する際にも有効な手段として用いられるが、土塁が存在しないという事実は、当初から予定されていた結果なのか、本来必要な場所でも何らかの理由で急きょ生じたものなのか、周囲の地形や地理的環境を考慮しながら判断する必要がある⁽¹¹⁾。

6 まとめ

山城は多くの構造物から成り立っており、城壁はその一つである。そして今回検討を加えた土塁は、さらにその一形態である。検討ではその土塁について、前半で永納山城における土塁の特徴を明らかにした。すなわち永納山城の土塁には、地形からみて2タイプに分類が可能という点である。そして、他の城壁構造との比較を通じ、城壁の規模に規格性の存在した可能性を指摘した。

後半では、永納山城での分類視点を基準に、他の古代山城の土塁を概観した。その結果、土塁そのものにはバリエーションが多く存在し、その背景にはいくつかの要因が存在することを指摘した。

その中で最も大きな要因は、それぞれの土塁が築かれる地形であり、土塁の幅や土塁の構築の有無といった要素は地形に規制されていた、あるいは地形を利用していた可能性を示した。そして、その影響を卓越して、山城を分類可能な要素が土塁の高さであるとした。これは非常に大まかなものかもしれないが、山城を築く上での共通認識が存在していたことを示すと考えられる。一方で、この高さの違いが何を示すのか、山城の時期差、地域差、あるいは目的等の違いを示しているのかは判断できない。それを明らかにしていくには、山城を構成する土塁以外の要素を踏まえた総合的な検討が必要である。

また、土塁はその構成物が「土」である点や、調査されている事例が山城の規模からみ

るとまだごく一部である点などから、その構造を検討することには限界がある。繰り返しとなるが、城壁は地形に規制される要素が強く、地形の複雑さに合わせて個性も複雑化するであろう。今回検討したものは、各山城の一部の特徴しか捉えられていない可能性も十分考えられる。どこまでを個性として捉え、どこからが山城を類型化していくことのできる要素であるのか、今後はさらなる資料の蓄積と詳細な検討が必要である。

【註】

(1) 宮小路賀宏・亀田修一氏によりに簡潔にまとめられている〔宮小路・亀田 1987〕。また、近年では向井一雄氏が精力的に研究史を見直し、古代山城研究における問題提起を行っている〔向井 2009・2010b 等〕。

(2) 鏡山猛編 1965『おつぼ山神籠石』佐賀県教育委員会

(3) 西条市教育委員会編 2005、2008、2012 にまとめられている。

(4) 列石の露出・非露出や切石・割石の違いは山城の編年指標としてよく用いられるが、研究者によってその序列は全く逆となる場合もある〔葛原 1994・乗岡 1992 等〕。列石前面の柱穴についてはおつぼ山神籠石で、柵列に伴うものとの考えが提示されたが、その後、版築支柱とする説、また両者の折衷的な説もみられる。版築支柱説が優勢な観はあるが、これに対しては、高正龍氏による問題提起がなされている〔高 1992〕。土塁の版築工法については、古代山城研究会で活発に議論されている〔古代山城研究会編 1999〕。

(5) 大野城跡や鬼ノ城、鞠智城の報告書等において、土塁に関する詳細な考察が行われている〔小澤編 2010、松尾編 2005。西住他編 2012 他〕。

(6) 上記のような詳細な検討は、古代の土木技術を復元していく上でも重要である。しかし、このような技術を基に、山城を分類できる程にはまだ資料が少ない。そこで、詳細な検討の進む土塁の研究とは逆行するかもしれないが、まずは大きな視点で土塁を再検討してみたい。

(7) 概報によると、高さ 7m 前後の土塁の存在が想定されている〔光市教育委員会編 2007〕。

(8) これらの特徴のうち、高さや幅については、向井一雄氏によりこのような傾向の存在することが示されている〔向井 2001〕。

(9) 矢野裕介〔2014〕

(10) 未完成説の代表的なものとしては阿部義平氏〔阿部 2002〕等があり、これに対し駅路や官衙のような施設からの視角を利用した「見せる山城」として抑止力的な城郭として評価する考えもみられる〔向井 2010a 等〕。

(11) 亀田修一氏は未完成の山城について、「未完成」の意味を検討していくことの必要性を指摘している〔亀田 2014〕。

【主要参考文献】

阿部義平 2002「古代山城と対外関係」『人類にとって戦いとは』4

岡山市教育委員会編 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告書』

小川秀樹 2010「豊前・御所ヶ谷神籠石」『古代文化』第 62 巻第 2 号

小川秀樹編 2006『史跡御所ヶ谷神籠石 I』行橋市教育委員会

小澤佳憲編 2010『特別史跡大野城跡整備事業 V』下巻 福岡県教育委員会

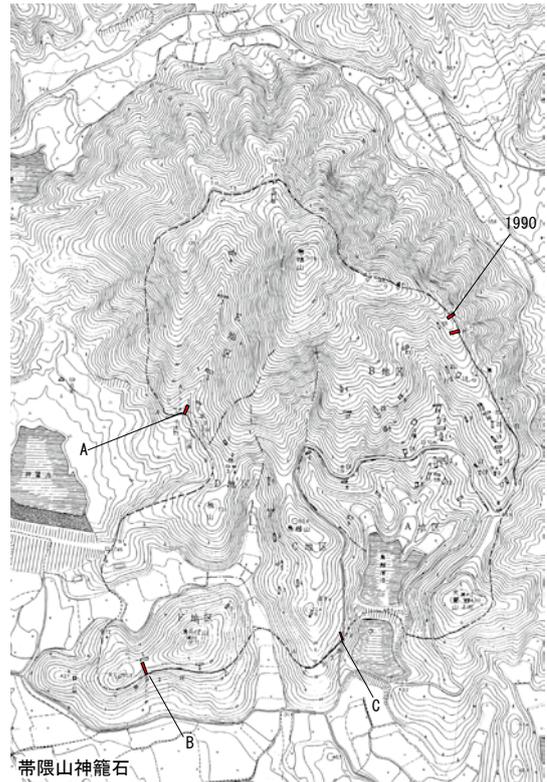
亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第 42 巻第 3 号

- 亀田修一 2011 「対馬金田城跡のいろいろな特徴」『対馬市文化財シンポジウム 対馬の古代を探る』
- 亀田修一 2014 「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ - 論考編 1 -』熊本県教育委員会
- 川述昭人編 1982 『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会
- 穎田町教育委員会編 1998 『国史跡 鹿毛馬神籠石』
- 鏡山猛 1967 「帯隈山神籠石とその周辺」『佐賀県埋蔵文化財報告書』第 16 集
- 葛原克人 1994 「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』
- 高正龍 1992 「「神籠石」の土塁構造（上）」『溝漣』第 2 号
- 古代山城研究会編 1999 「古代山城の土塁構造」『溝漣』第 8 号
- 児玉真一他編 2001 『史跡 杷木神籠石』杷木町教育委員会
- 西条市教育委員会編 2005 『永納山城跡 - 平成 14 年度～ 16 年度調査報告書 - 』
- 西条市教育委員会編 2008 『史跡永納山城跡Ⅰ』
- 西条市教育委員会編 2012 『史跡永納山城跡Ⅱ』
- 筑紫野市教育委員会編 2008 『阿志岐城跡 阿志岐城跡確認調査報告書』
- 西住欣一郎他編 2012 『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 乗岡実 1992 「古代山城」『吉備の考古学的研究』下
- 光市教育委員会 2007 『石城山神籠石第一次・第二次調査概要書』
- 松尾洋平他編 2005 『古代山城 鬼ノ城』
- 宮小路賀宏他編 1970 『杷木神籠石』杷木町教育委員会
- 宮小路賀宏・亀田修一 1987 「神籠石論争」『論争・学説 日本の考古学』6
- 向井一雄 2001 「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第 9・10 合併号
- 向井一雄 2009 「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝漣』第 14 号
- 向井一雄 2010a 「駅路からみた古代山城 見せる山城論序説」『月刊 地図中心』453
- 向井一雄 2010b 「古代山城論 - 学史と展望 - 」
- 向井一雄 2010c 「古代山城研究の最前線 - 近年の調査成果からみた新古代山城像 - 」
- 矢野裕介 2014 「鞠智城跡・土塁の構築とその特徴」『鞠智城跡Ⅱ - 論考編 1 -』熊本県教育委員会

古代山城における土塁構造の検討



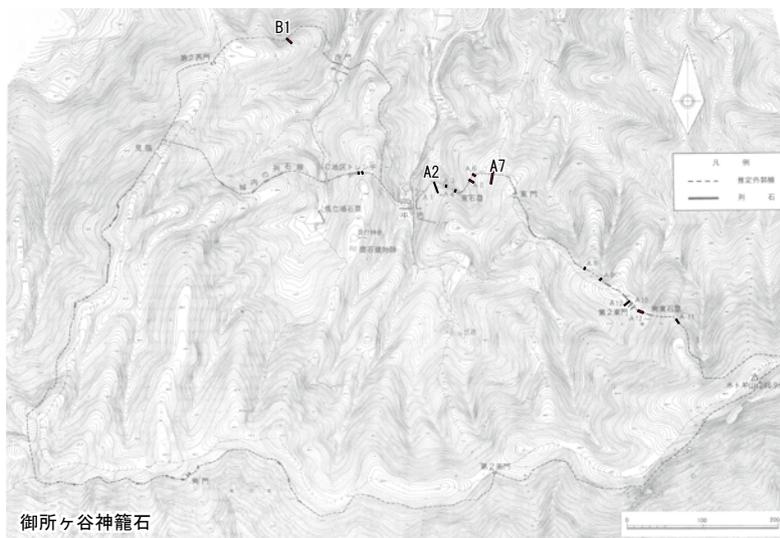
女山神籠石



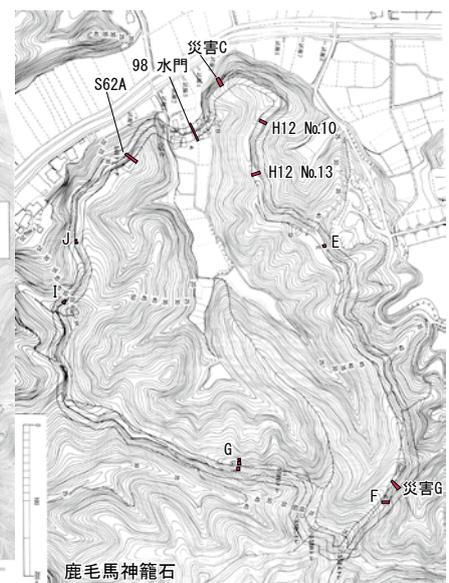
帯隈山神籠石



杷木神籠石



御所ヶ谷神籠石

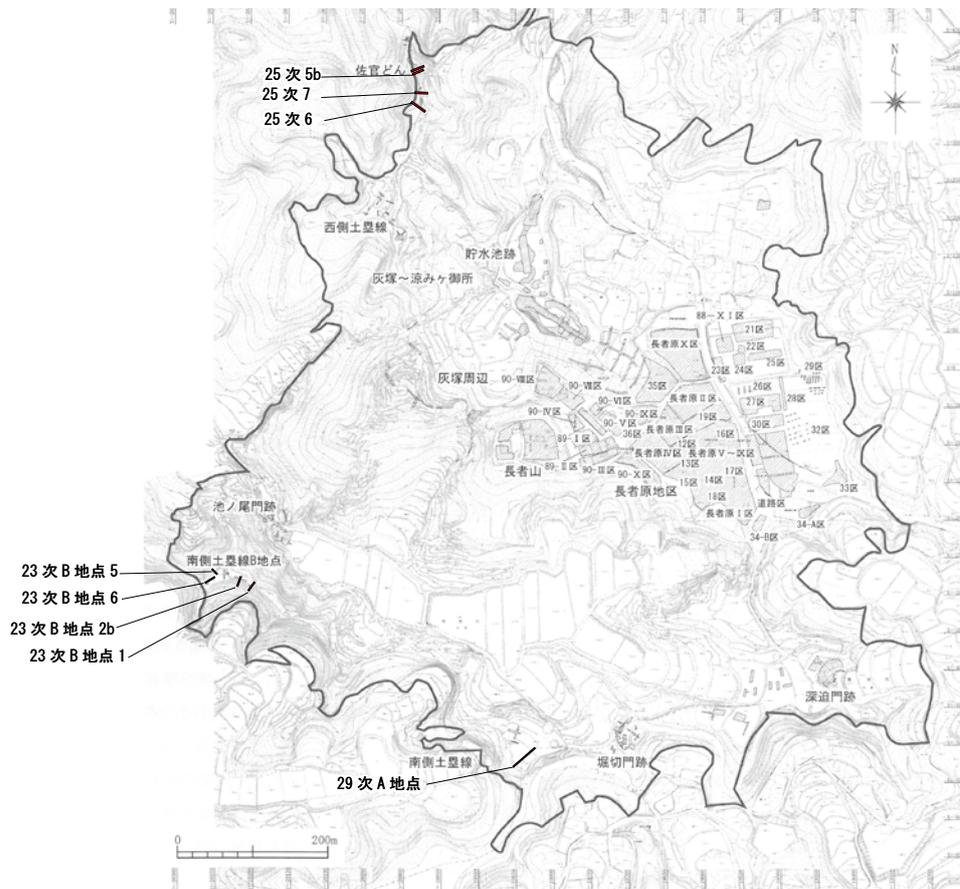


鹿毛馬神籠石

図10 山城地形図(1) (S=1/10000)



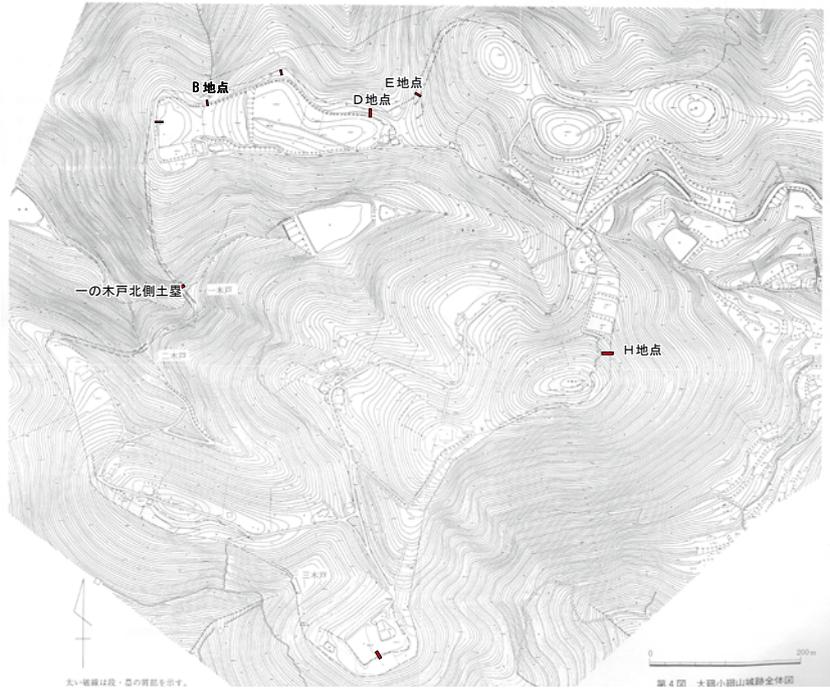
阿志岐山城



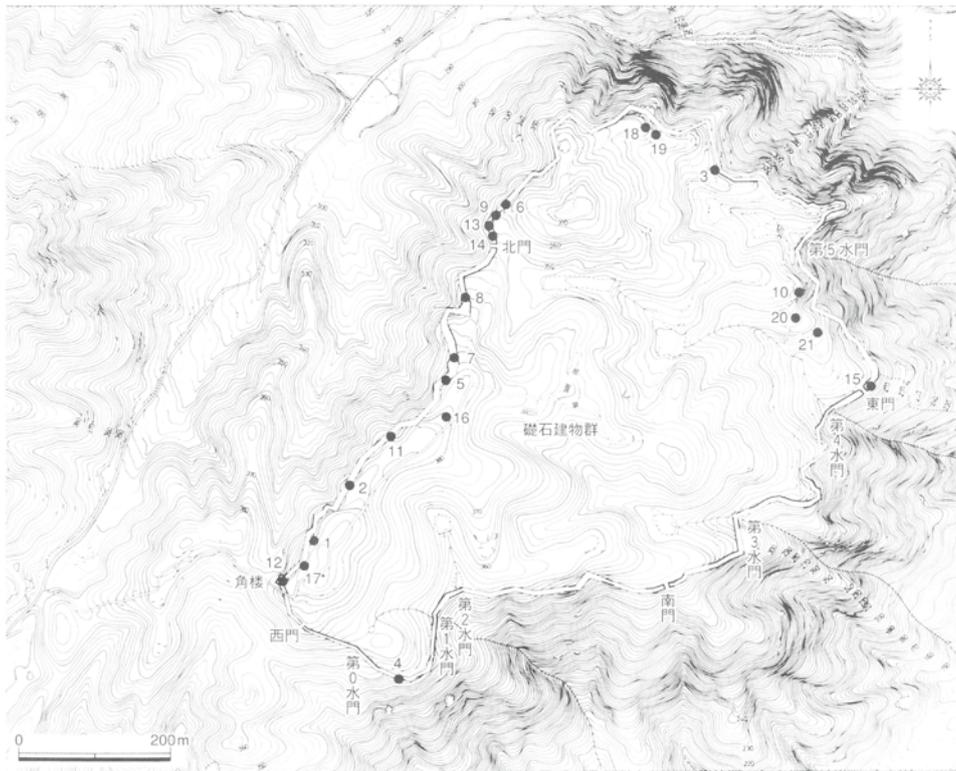
鞠智城

図 11 山城地形図 (2) (S=1/10000)

古代山城における土塁構造の検討



大廻小廻山城



鬼の城

図 12 山城地形図 (3) (S=1/10000)

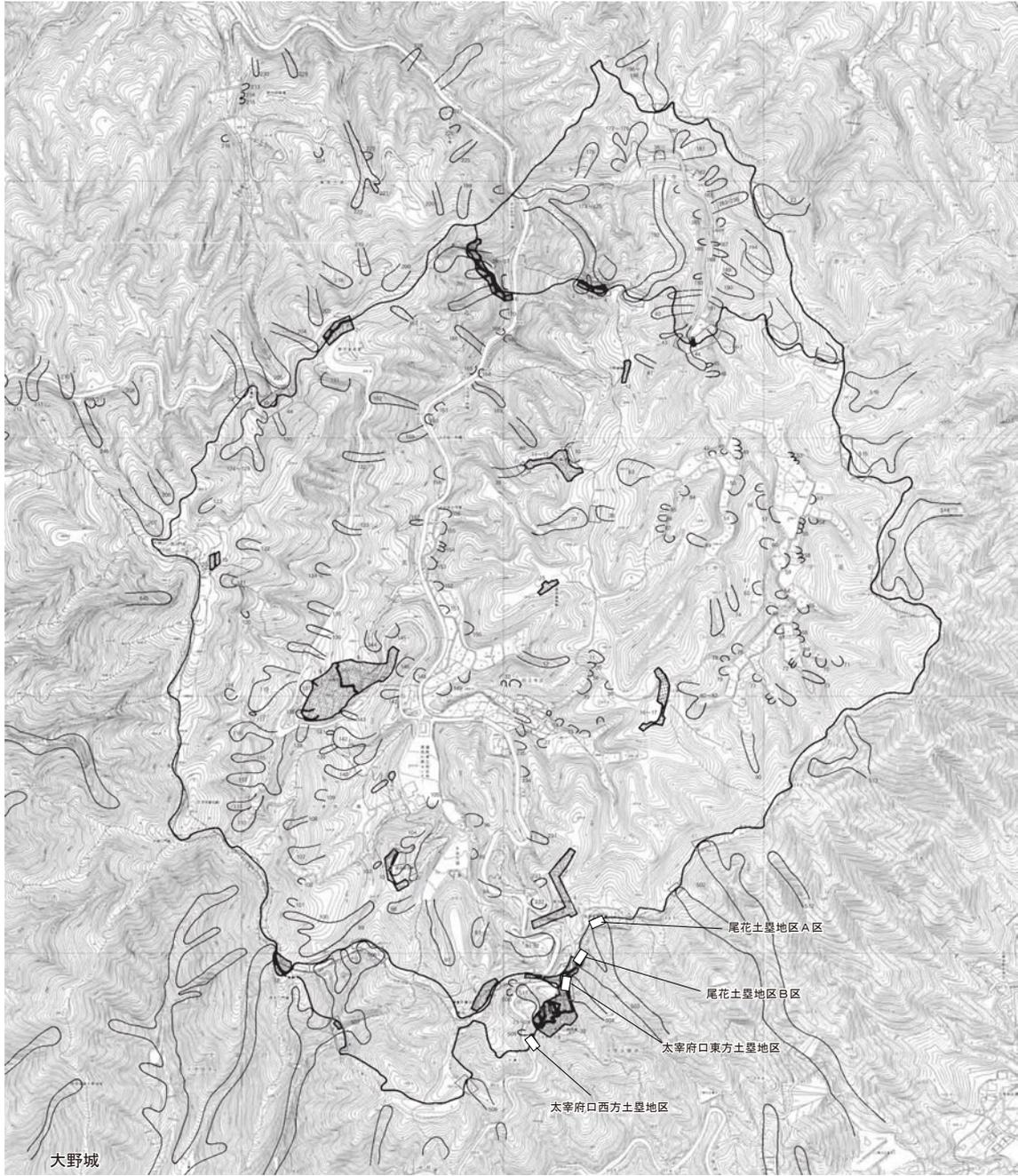


图 13 山城地形图 (4) (S=1/20000)